

令和元年度
ふるさと秋田農林水産大賞

受賞者の業績



令和 2 年 3 月
秋田県農林水産部

目 次

1	ふるさと秋田農林水産大賞の概要	1
---	-----------------	---

2	令和元年度ふるさと秋田農林水産大賞受賞者	2
---	----------------------	---

3 受賞者の業績

【産地部門】

大賞	J A秋田おばこ ねぎ部会（大仙市）	6
----	--------------------	---

大賞	J A秋田ふるさと きゅうり部会（横手市）	10
----	-----------------------	----

【担い手部門】

～ 経営体の部 ～

農林水産大臣賞・大賞	安田 善八（男鹿市）	14
------------	------------	----

大賞	佐藤 拓史（由利本荘市）	18
----	--------------	----

大賞	農事組合法人メガファーム（横手市）	22
----	-------------------	----

～ 未来を切り拓く新規就農の部 ～

大賞	合同会社久保井ファーム 代表社員 久保井 優司（能代市）	26
----	---------------------------------	----

【農山漁村活性化部門】

農林水産大臣賞・大賞	株式会社しらかみファーマーズ（北秋田市）	30
------------	----------------------	----

令和元年度ふるさと秋田農林水産大賞審査委員会 委員名簿	34
-----------------------------	----

1 ふるさと秋田農林水産大賞の概要

■ふるさと秋田農林水産大賞の目的

先人が作り上げた美田や農産物、豊富な森林資源などを次の世代に受け継いでいくため、「ふるさと秋田農林水産ビジョン」の目指す姿の実現に向けて、模範となる活動を展開し、顕著な実績を上げている農林漁業者等を表彰するとともに、その取組を広く普及し、魅力ある農林水産業と農山漁村づくりを推進する。

■各部門の表彰対象及び表彰点数

表 彰 部 門	表 彰 対 象	表 彰 点 数
1 産地部門	産地の特徴を活かし、積極的な産地拡大に取り組む農業者等で組織する集団	大賞2点
2 担い手部門		大賞4点
1) 経営体の部	農業・漁業経営で優良な実績を上げ、地域のモデルとなる個人や法人等	(3点)
2) 未来を切り拓く 新規就農の部	地域の担い手として、活躍が見込まれる新規就農者や農外からの参入者等	(1点)
3 農山漁村活性化部門	6次産業化に取り組み、食育、直売活動、耕作放棄地活用、グリーン・ツーリズム等、地域を活性化する活動を行っている法人、集落、集団等	大賞1点

2 令和元年度ふるさと秋田農林水産大賞受賞者

【産地部門】

受賞区分	名 称	所在地	品 目	取 組 概 要
大 賞	J A秋田おばこ ねぎ部会	大仙市	ねぎ	○ 平成25年に設立した「美郷町ねぎ部会」と「仙北エリア園芸振興協議会」を母体に、29年に広域で活動を行う「J A秋田おばこねぎ部会」を設立した。30年には販売額1億円を突破し、更なる産地拡大に向けた活動を展開。 ○ 越冬大苗を活用した早どり栽培の導入により、栽培面積が増加するとともに、出荷期間も拡大している。また、土壌分析経費の一部を部会が補助し、会員が利用しやすい環境づくりに努めることにより、適正な施肥管理を推進している。 ○ 市場ニーズの高い2本結束の出荷に取り組んでおり、単価が高く、所得向上につながることから、今後も出荷量を増やしていくことにしている。
大 賞	J A秋田ふるさと きゅうり部会	横手市	きゅうり	○ 平鹿地域では昭和53年頃の水田利用再編を契機にきゅうり栽培に取り組み、平成10年にJ A秋田ふるさとの発足と同時にきゅうり部会を組織し、生産を拡大した。27年には園芸メガ団地での営農が開始され、大規模きゅうり栽培にも取り組んでいる。 ○ 露地栽培において、防虫ネット栽培を拡大し、強風時のスレ果の発生や葉傷みなどによる収量・品質低下の軽減に取り組んでいる。 ○ 熟練農家を技術アドバイザーとして任命したほか、部会員による出荷時検査を実施し、栽培技術や品質の向上に努めている。また、土壌分析に基づいた化学肥料の削減や、通いコンテナによる流通の合理化にも取り組んでいる。

【担い手部門】

～ 経営体の部 ～

受賞区分	名 称	所在地	品 目	取 組 概 要
農林水産 大臣賞 ・ 大 賞	安田 善八	男鹿市	輪ギク 洋花類 水稻 野菜類	○ 平成15年4月に就農し、福岡県八女市の篤農家での研修後、パイプハウス12棟（1,300坪）による輪ギクの大規模長期出荷体制を確立した。27年には園芸メガ団地に参加し、更なる規模拡大を図っている。 ○ 選花ロボットや結束機を導入することで省力化を図り、シェードや電照、直挿し、無摘心栽培等の技術を駆使しながら、6月から12月までの輪ギクの長期出荷を行っている。また、葉物野菜や洋花類を組み合わせ、年間を通して収入を確保している。 ○ J A花き部会長を歴任し、現在は秋田県花き生産者連絡協議会きく部会の部会長を務めているほか、「男鹿・潟上地区園芸メガ団地」では、若手の指導に当たるなど、地域内外の生産者の手本となっている。
大 賞	佐藤 拓史	由利本荘市	畜産 (肉用牛)	○ 北海道の農業高校教員を経て、平成25年にUターン就農し、父から繁殖牛20頭を承継して、肉用牛（繁殖）経営を開始した。現在は飼育頭数を63頭まで拡大し、地域を代表する若手繁殖農家として活躍している。 ○ 衛生対策と基本技術を徹底し、専門的な知識と数値管理により優良な子牛の生産に取り組んでおり、事故率3%以内、年間子牛生産率76%という高成績を実現している。 ○ 県外の肥育農家と提携し、素牛生産から肥育、食肉提供までの一貫した流通体制の整備や交流活動を行い、生産者の顔が見える畜産経営を実践しているほか、地元の耕種農家への堆肥供給や、若手生産者と連携したイベント出展などの地域活動にも積極的に取り組んでいる。

【担い手部門】

～ 経営体の部 ～

受賞区分	名 称	所在地	品 目	取 組 概 要
大 賞	農事組合法人 メガファーム	横手市	ほうれんそう きゅうり すいか キク	○ 平成27年に園芸メガ団地整備事業を契機として、「(農)越前」の構成員6名が、園芸品目の経理の明確化や法人内の意思決定の効率化を図るため、園芸部門を独立させて「(農)メガファーム」を設立し、営農3年目となる29年以降、販売額1億円を達成している。 ○ 大規模施設によるほうれんそうの長期出荷を行うほか、きゅうり栽培にはネットハウスを積極的に導入し、強風によるキズ果等の防止に取り組んでいる。キクでは省力機械を導入し、労働力軽減を進めているほか、キクを主体に同一品種の長期出荷を実現している。 ○ 熟練者と初心者が組んで作業を進めることにより、早期の技術習得を図っているほか、「トヨタ式カイゼン」を取り入れ、作業の効率化を進めている。

～ 未来を切り拓く新規就農の部 ～

受賞区分	名 称	所在地	品 目	取 組 概 要
大 賞	合同会社 久保井ファーム 代表社員 久保井 優司	能代市	ねぎ キャベツ	○ 平成26年に東京から能代市に移住し、園芸メガ団地での研修を経て、28年に経営を開始した。経営規模の拡大に伴い、労働力の安定確保に向けて、30年に「(同)久保井ファーム」を設立し、更なる経営発展を目指している。 ○ 移住者が就農する上でポイントとなる「経験」、「資金」、「農地」、「地域」の壁を地域の仲間達の協力で乗り越えてきた。県内移住就農の優良事例として数多く紹介され、農業に挑戦しようとする多くの若者達に元気を与えている。 ○ 地域で生産が盛んなねぎとキャベツの大規模栽培に取り組み、令和2年度には地域の若手生産者とともに、ねぎ、キャベツの大規模園芸拠点の整備を計画しており、地域農業のパワーアップにも貢献している。

【農山漁村活性化部門】

受賞区分	名 称	所在地	取 組 概 要
農林水産 大臣賞 ・ 大 賞	株式会社 しらかみファーマーズ	北秋田市	○ 建設業の強みである重機と施工技術を活用して耕作放棄地を再生し、地域活性化につなげることを目的に、平成23年に北秋田市内の建設業者3社が共同出資し、「(株)しらかみファーマーズ」を設立した。にんにく、だいこんの生産と加工に取り組んでおり、地域における雇用の貴重な受け皿となっている。 ○ 主な加工品である「黒にんにく」は、試行錯誤を繰り返し、独自の製造ラインとマニュアルを開発して安定した品質の製品を生産しており、「白神フルーツ黒にんにく」の商品名で全国各地へ販路を拡大している。 ○ 6次産業化による周年雇用のモデル的な経営となっているほか、「北秋田・大館地域にんにく生産振興協議会」、「秋田県にんにく生産者協議会」の設立と運営に主体的な役割を果たしており、にんにく生産を通じて、本県の農業振興と地域の活性化に貢献している。

3 受賞者の業績



契約出荷を基盤にしたねぎの産地拡大

ＪＡ秋田おばこ ねぎ部会

〒０１４－００１７
秋田県大仙市佐野町

１ 産地発展の経過

●平成初期

仙北地域のねぎ栽培は、美郷地区と角館地区が盛んであり、美郷地区は市場出荷、角館地区は関東のねぎ集荷販売業者との契約出荷を中心に栽培。

●平成25年

両地区とも栽培規模が拡大し、部会設立の機運が高まってきたことから、平成25年に美郷地区において「美郷町ねぎ部会（12人）」、角館地区を中心に「仙北エリア園芸振興協議会（7人）」が立ち上がり、それぞれ活動を開始。

●平成29年

ＪＡ全体の販売額が順調に増加し、８千万円を越えた頃から、ＪＡ秋田おばこの広域組織の設立の機運が高まり、「ＪＡ秋田おばこねぎ部会」が７月に設立。

●平成30年

部会設立後も順調に販売額を伸ばし、設立翌年の平成30年には、高単価の追い風も受けて販売額１億円を突破。

２ 活動内容

（１）複合作目としてのねぎ栽培

県内有数の稲作地帯である仙北地域において、複合作目としてねぎの栽培が盛んになっており、ベテラン生産者を中心に様々な講習会等を開催し、部会員の生産技術の底上げを図ることで、栽培面積が増加し販売額も着実に伸びている。

（２）部会員の技術向上に向けた取組

部会員には、育苗から収穫までの定期的な現地講習会や座学による学習会の開催、先進地視察を通じた技術の研鑽など、技術向上に向けて活動している。



【育苗講習会】

（３）ねぎ栽培を通じた地域への貢献

管内の学校給食向けにねぎを継続的に供給するなど、市場出荷を行うだけではなく、地元へ良食味のねぎの供給を続けている。

(3) 販売額の経緯

項 目	単位	H30	H29	H28	H27
作付農家戸数	戸	44	43	43	43
認定農業者数	人	31	31	31	31
1戸当たり面積	ha	0.53	0.51	0.38	0.37
作付面積	ha	23.3	22.1	16.4	16.0
10a当たり収量	kg/10a	1,637	1,572	2,176	2,040
生産量	t	382	347	358	326
出荷量	t	382	347	358	326
平均単価	円/kg	282	256	242	225
販売額	千円	109,564	88,932	86,643	73,387

(4) 作目体系図

作目名	面積 規模	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	生産量 及び 出荷量
越冬苗 夏どりねぎ	23 ha				△						○			382t
夏ねぎ			○	△										
秋冬ねぎ				○	△									

※○：播種 △：定植 □：収穫

3 消費者や実需者等 ニーズに対応した取組

(1) 契約出荷による経営の安定化

総出荷量の半分以上(H30:60%)を加工業務用として契約出荷している。出荷時は「宝ねぎ」という専用の箱で出荷しており、市場向けとはやや異なる出荷規格となっているが、製品率の向上と安定した価格により生産者の経営の安定に寄与している。

(2) 高単価を見込める新規格への取組

市場において有利販売できるよう、直接バイヤーと交渉を行っている全農あきたの要望に応え、2本結束の規格の出荷に取り組んでいる。2本結束の規格の出荷は、県内において実施するJAが少ない中、栽培技術が高く、規格を遵守できる生産者を選んで実施して

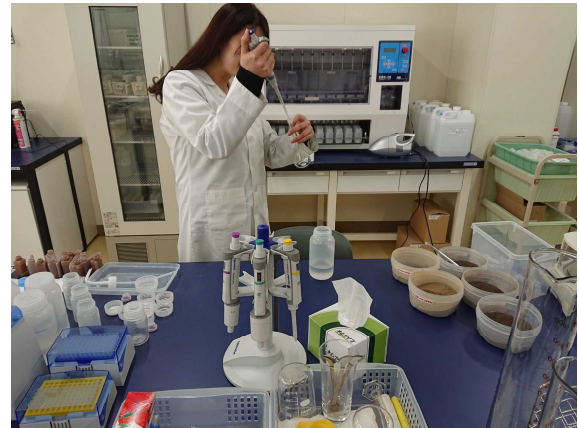
いる。また、単価が高く、所得向上に大きく寄与していることから、今後出荷量を増やす予定としている。



【出荷調整作業】



【2本結束】



【土壌診断】

4 技術紹介

（１）新たな作型の導入による経営規模の拡大

夏ねぎでは、従来は8月中旬頃からの収穫が作型の中心だったが、近年は秋田県農業試験場が開発した越冬大苗を活用した早どり栽培が増加してきており、栽培面積の増加とともに出荷期間も拡大してきている。

1経営体当たりの平均栽培面積は50a程度であり、夢プラン事業等を活用して根葉切り機、収穫機等を導入するなど、機械化を進めることにより労働効率を上げ、更なる面積の拡大に努めている。



【収穫機による収穫】

（２）土壌診断による効率的施肥の推進

過剰な肥料は生育不良を起こすだけでなく、べと病等の病害の発生を助長するとされていることから、JA秋田おばこでは、独自に整備した土壌分析室を活用し、生産者の希望によって有料で土壌診断を行い、適正な施肥管理を積極的に推進している。

ねぎ部会では、部会員に経費の一部を補助し、土壌分析の実施を推進している。

（３）栽培技術の高位平準化への取組

定期的な現地講習会や座学による学習会、先進地視察研修など、生産者の学習の場を設けており、既存技術の共有、先進技術や優良事例といった新たな知見の習得などにより、生産者の技術の幅を広げ生産性の向上を図っている。



【講習を受ける若手農業者】

（４）準園芸指導員による指導

J A秋田おぼこでは、経験豊富なベテラン生産者を準園芸指導員として任命し、営農指導員とともに、新規栽培者のフォローアップや講習会時の助言等を行っている。

ねぎ部会においても、令和元年から２名の準園芸指導員を任命し、様々な講習会等で活動してもらうことにより、部会員の生産技術の底上げを図っている。



【準園芸指導員による育苗講習】



【準園芸指導員による目揃講習】

5 その他特記事項

（１）更なる産地拡大に向けて

バイヤー等を招いて定期的には場見学会を実施し、産地の生産状況等の情報を販売先と共有することにより、販売環境を整えている。また、新たな資材の導入に当たっては、部会独自に展示ほを設置し、その効果の実証に努めており、品種試験の実施についても検討しているところである。



長期安定出荷による きゅうり販売額3億円達成

J A 秋田ふるさと きゅうり部会

〒013-0205

秋田県横手市雄物川町今宿字前田面

1 産地発展の経過

J A 秋田ふるさとのある横手地域は、寒暖差の大きい盆地の気候を利用し、品質の良い野菜生産を行ってきた。J A 秋田ふるさとにおいて、きゅうりは、すいかに次ぐ園芸の主力品目となっており、近年、園芸メガ団地における大規模経営体の躍進や防虫ネット栽培の導入による収益性の向上などにより、産地が拡大している。

●昭和53年頃

水田利用再編が行われ、転作作物として本格的にきゅうり栽培を開始。

●平成元年

十文字町が、地域に先駆けてきゅうりの指定産地となる。

●平成10年

J A 秋田ふるさとが発足し、同時にきゅうり部会が設立。

●平成18年

防虫ネット栽培が開始。

●平成24年

J A 秋田ふるさととJ A おものがわが合併。

●平成25年

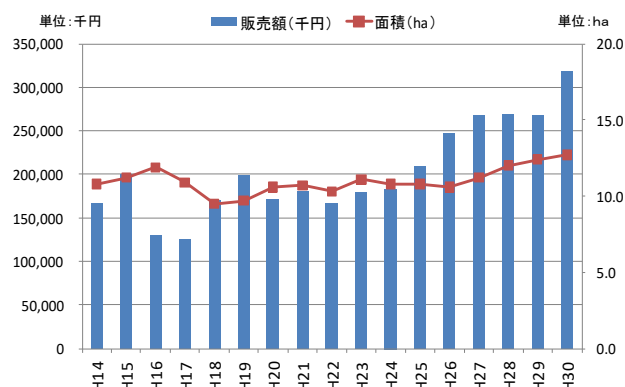
販売額2億円を達成。

●平成27年

十文字地区に整備した園芸メガ団地において、きゅうり栽培を主体に営農を開始。

●平成30年

念願だった販売額3億円を達成。



【きゅうりの販売額の推移】

2 活動内容

(1) 園芸メガ団地を活用した大規模きゅうり栽培

高齢化等による生産者の減少が問題となる中、J A 秋田ふるさとが事業主体となり、平成27年、園芸メガ団地育成事業を活用して、大規模きゅうり栽培に取り組むこととした。

当初は、労働力不足等により管理作業の遅れが発生し、大規模経営は困難と思われたが、部門制の導入やシルバー人材の活用に加え、おうとう農家等による労働力の補完を実施したことにより、栽培が軌道に乗り、地域におけるモデル的経営体となっている。

(2) 防虫ネット栽培の普及

J A 秋田ふるさとでは、露地栽培が中心となっているが、風によるスレ果の発生や葉傷みなどによる収量の低下が発生していた。

このため、スレ果等を防止する技術として、防虫ネット栽培の導入を進めた。当初は、導入規模が小さく、費用対効果などのメリットがあまり感じられなかったが、園芸メガ団地を整備し、大規模生産での被害軽減効果が実感されたことにより、産地として導入を推進

してきており、防虫ネット栽培の面積は、平成30年度の0.92ha（2,760坪）から、令和元年度の1.51ha（4,530坪）へと1.6倍に拡大している。



【防虫ネットハウス】

（３）栽培技術の共有化

これまで、旧市町村単位で栽培が行われていたため、地域によって品種や栽培方法に違いがあり、収量に差があった。そこで、栽培技術の平準化を目的に、地区ごとの講習会等を一本化し、全地区がまとまって行うこととした。それぞれの地区の良さを取り上げること、栽培技術の高位平準化が図られ、単収の向上に繋がっている。



【栽培講習会】

（４）技術アドバイザーの設置

部会員の栽培技術の平準化のため、生産者の中でも特に栽培技術の高い生産者を「技術アドバイザー」に任命し、部会員の相談に対応した（～平成30年）。

栽培技術の高位平準化が図られたことにより、収量、品質が確保され、市場では高単価で取引されている。

（５）販売額の経緯

項 目	単位	H30	H29	H28	H27
作付農家戸数	戸	92	90	85	89
1戸当たり面積	a	13.8	13.7	14.1	12.6
作付面積	ha	12.7	12.4	12.0	11.2
10a当たり収量	kg/10a	7,150	7,544	8,072	8,175
秀 品 率	%	70	74	73	73
生 産 量	t	908.1	935.5	968.6	915.6
出 荷 量	t	908.1	935.5	968.6	915.6
平均単価	円/kg	353	286	277	292
販 売 額	千円	320,654	267,663	268,538	267,590

※平成30年度は、2度の台風により大きく出荷量を減らしている。

(6) 作目体系図

作目名	面積 規模	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	生産量 及び 出荷量
きゅうり														
露地	9.3 ha						○	—	—	—				908.1t
防虫ネット	0.9 ha					○	—	—	—	—				
半促成	2.3 ha				○	—	—	—	—	—				
抑制	0.3 ha								○	—	—			

※○：定植 □：収穫

3 消費者や実需者等 ニーズに対応した取組

(1) 安心・安全なきゅうりの提供

農薬の使用や肥料散布等の栽培履歴を作成し、トレーサビリティ体制を構築することで、きゅうり栽培の安心・安全を実需者へ提示している。

生産者は、栽培履歴を記帳することにより、農薬の使用回数を減らすようになり、より安全性の高いきゅうりの生産を心掛けている。

また、残留農薬分析を年6回以上行っており、安心・安全をデータで示すことにより、実需者との信頼関係を深めている。

(2) 部会員による品質検査

品質のバラつきがないきゅうりを販売していくためには、組織内部における徹底したチェックと改善が必要であることから、部会員が交代制で、毎日、品質検査を行い、実需者に品質の良いきゅうりを提供している。



【部会員による検査】

(3) 量販店における対面販売の実施

年2回、量販店において部会役員等が対面販売を実施している。消費者や小売業者との交流から、的確に消費者ニーズを把握するよう心掛けており、生産にフィードバックしている。



【都内量販店での販促】

（４）コンテナ出荷による段ボールの削減

実需者の一部は、段ボールの処理やリサイクルを気にしており、そのような実需者の要望に応えるため、出荷の一部を、従来の5kg詰め段ボールから、10kg詰めコンテナに変更して、出荷を行っている。

コンテナ出荷の割合は、全出荷量の約1／5となっており、段ボール枚数で約40,000枚の減量となっている。



【コンテナ出荷】

4 技術紹介

（１）土づくり

①土壌分析等による環境に優しい農業の実践

土壌分析を行うことで、化学肥料の使用量を削減し、環境に優しい農業を実践している。

②堆肥の施用

平鹿地域は、養豚が盛んで豊富な堆肥が供給されており、きゅうり部会でも、積極的に堆肥を使用し、土づくりを行っている。

（２）防虫ネット栽培

きゅうりの露地栽培では、強風によるスレ果や葉傷み、害虫の発生によるウイルスの蔓延により、品質や収量の低下を招いている。

このため、防虫ネット栽培を導入することで、強風被害の大幅な低減と、アブラムシ等の害虫の侵入によるウイルス病対策を実施している。防虫ネットは、保温効果もあることから、栽培期間の延長が可能となり、寒冷地における収量向上のメリットもあるため、今後、防虫ネット栽培を拡大していくこととしている。

（３）多品種栽培による安定生産

品種の統一は画一的な栽培管理が可能となる反面、気象災害や労働力が集中するなどのリスクもあることから、品種数を増やして、生育ステージを分散させるなどリスクの低減を図っている。

5 その他特記事項

（１）園芸メガ団地を核としたサテライトタイプ団地の形成

産地拡大に向けて、大規模経営体の育成を行っており、令和元年度は、サテライトタイプの園芸メガ団地に1経営体が取り組むこととなっている。団地においては、防虫ネット栽培が基本となっており、十文字地区の園芸メガ団地の取組をモデルとしている。

（２）新規就農者の確保

当地域は、すいかや花き、果樹栽培が盛んであり、それらの作目での新規就農者が多い。きゅうり栽培についても、園芸メガ団地を始め、健全な経営体が多いことから、新規就農希望者に注目されており、近年は、毎年2名程度確保されるようになっている。

（３）規格の簡素化

部会員の高齢化と労働力不足に対応するため、出荷調製作業を簡素化している。M、L、2L等の大きさやA、B等の品質の規格等を廃止して1規格とし、規格外との2種類で出荷している。



若獅子のごとく駆け続ける キク栽培のリーダー ～大規模施設栽培への飽くなき挑戦～

安田 善八（39歳）

〒010-0341

秋田県男鹿市船越字サッピ

1 経営発展の経過

●平成15年

大学を卒業後、親元に就農して稲作とキク栽培を学んだ後、同年10月から平成16年3月までの半年間、県が実施する国内先進地農家研修制度を活用し、輪ギクの産地である福岡県八女市の篤農家の下でキクの栽培技術と大規模経営について研修。

●平成16年

研修終了後、主体的にキク部門を担うとともに、両親の営んでいた山間のほ場を整理し、平成17年に900坪の規模で現在の場所で施設栽培を開始。

●平成18年

5棟360坪のハウスを増設して1,260坪の規模とし、試行錯誤しながら輪ギクと洋花、ほうれんそうなどの作付けサイクルを確立。

●平成22年4月

爆弾低気圧で施設2棟280坪が損壊したが、再建に当たっては規模拡大して320坪とするなど、不屈の精神で経営を前進。

●平成26年2月

父から経営移譲され、簿記記帳等による適切な経営管理を行い、雇用労働力の適正配分や周年品目の導入により収益を確保。また、研修先で学んだ経営のノウハウを生かし、当面の目標であった販売額2,000万円を達成。

●平成27年

男鹿・潟上地区園芸メガ団地に参入し、従来からの1,300坪に園芸メガ団地分の400坪を加え、更に経営規模を拡大。

2 経営内容

（1）家族経営を軸とした大規模施設栽培

家族労働力を中心とした水稻＋花きの複合経営を営み、水稻部門は父親が、花き部門は本人が専従的に栽培・経営管理を行っている。作業状況に応じて労働力を補完しあっているほか、定植や収穫など、作業が集中する時期は、臨時雇用により労働力の調整を図っている。

また、選花ロボットや、結束機を導入することで省力化を図り、安定した品質の確保と大規模経営を実現している。



【ほ場の様子】

（2）輪ギクを主とした周年栽培体系の確立

17棟のハウスを計画的に活用し、シェードや電照、直挿し、無摘心栽培といった技術を駆使しながら、6月から12月までの長期出荷を可能にしている。

また、冬期の低温・低日照で輪ギク生産が困難な時期は、低温でも生育・開花・収穫できる花きや薬物野菜を導入し、周年での収入確保を実現している。

(3) 経営の現状

経営規模	主 作目と規模	戦 略 作 目				稲 作																																																																									
	輪ギク	その他花き		野菜																																																																											
	規 模	80.9 a	2.3 a		13.2 a		300 a																																																																								
の 状 況	労働力の状況	労働員数 4人	労 働 力 の 状 況																																																																												
			続柄	本人	妻	父	母	雇用等 (パート等)																																																																							
			就農日数	300日	100日	300日	300日	延べ200人																																																																							
現 状	主な農機具及び施設	<table><tr><td>種 類</td><td>台数</td><td>導入年度</td><td>性能・規模等</td><td>利用した補助事業と融資制度</td><td>備 考</td></tr><tr><td>農作業舎</td><td>1</td><td>H17</td><td>238㎡</td><td>スーパーL</td><td></td></tr><tr><td>パイプハウス</td><td>5</td><td>H17</td><td>120坪</td><td>夢プラン事業</td><td></td></tr><tr><td>電照設備</td><td>1</td><td>H17</td><td></td><td>〃</td><td></td></tr><tr><td>ロボット選花機</td><td>1</td><td>H18</td><td></td><td>〃</td><td></td></tr><tr><td>予冷庫</td><td>1</td><td>H18</td><td>3坪</td><td>〃</td><td></td></tr><tr><td>トラクター</td><td>1</td><td>H19</td><td>28ps</td><td></td><td>自己資金</td></tr><tr><td>パイプハウス</td><td>4</td><td>H18</td><td>74坪</td><td></td><td>〃</td></tr><tr><td>パイプハウス</td><td>1</td><td>H18</td><td>120坪</td><td>夢プラン事業</td><td></td></tr><tr><td>パイプハウス</td><td>2</td><td>H22</td><td>160坪</td><td>〃</td><td></td></tr><tr><td>管理機</td><td>1</td><td>H27</td><td>10ps</td><td>〃</td><td></td></tr></table>												種 類	台数	導入年度	性能・規模等	利用した補助事業と融資制度	備 考	農作業舎	1	H17	238㎡	スーパーL		パイプハウス	5	H17	120坪	夢プラン事業		電照設備	1	H17		〃		ロボット選花機	1	H18		〃		予冷庫	1	H18	3坪	〃		トラクター	1	H19	28ps		自己資金	パイプハウス	4	H18	74坪		〃	パイプハウス	1	H18	120坪	夢プラン事業		パイプハウス	2	H22	160坪	〃		管理機	1	H27	10ps	〃	
		種 類	台数	導入年度	性能・規模等	利用した補助事業と融資制度	備 考																																																																								
		農作業舎	1	H17	238㎡	スーパーL																																																																									
		パイプハウス	5	H17	120坪	夢プラン事業																																																																									
		電照設備	1	H17		〃																																																																									
		ロボット選花機	1	H18		〃																																																																									
		予冷庫	1	H18	3坪	〃																																																																									
		トラクター	1	H19	28ps		自己資金																																																																								
		パイプハウス	4	H18	74坪		〃																																																																								
		パイプハウス	1	H18	120坪	夢プラン事業																																																																									
		パイプハウス	2	H22	160坪	〃																																																																									
管理機	1	H27	10ps	〃																																																																											
経営規模 拡大の 概 要	年 次		H26		H27		H28		H29		H30		R01																																																																		
	作	輪ギク	64.8	→	80.9	→	80.9	→	80.9	→	80.9	→	80.9 a																																																																		
		その他花き	4.6	→	2.3	→	2.3	→	2.3	→	2.3	→	2.3 a																																																																		
	目	野菜	11.9	→	13.2	→	13.2	→	13.2	→	13.2	→	13.2 a																																																																		
		稲作	300.0	→	300.0	→	300.0	→	300.0	→	300.0	→	300.0 a																																																																		

(4) 作目体系図

作目名	面 積 規 模 (a)	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	出荷量
輪ギク	80.9	Y					□		Y				□	321千本
その他 花き	2.3			□							◎			5千本
野菜	13.2	- □									○			2,318kg

※ Y : 挿し芽 ○ : 播種 ◎ : 定植 □ : 収穫

3 消費者や実需者等ニーズ に対応した取組

(1) 市場ニーズを把握した品種選定

就農当初から、J A部会などが主催する研修会や市場販促活動等に積極的に参加し、市場の動向やニーズの把握に努めている。

また、現在、部会長を務める秋田県花き生産者連絡協議会きく部会では、市場関係者を招聘して研修会を開催するほか、新規品目に対する提言をいただいている。また、県内及び首都圏市場で人気投票を行っており、市場の求める品目や品種について、県全体での生産を推進するなど、常に市場ニーズを意識した取組を進めている。



【首都圏市場にて実施したきく部会のニーズ調査】

4 技術紹介

(1) 技術を駆使した多収・高品質輪ギク生産

夏期冷涼な気象を生かして、市場ニーズの高い、輪ギク生産に取り組んでいる。

暖地に比べて栽培適期が短いため、挿穂を土に直接挿して発根・活着させる「直挿し栽培」や、1本の挿穂から1本の切り花を収穫する「無摘心栽培」により、生育期間を短縮し、ほ場の回転率を上げることで、効率的な栽培体系を実現している。

単位面積当たりの定植本数については、県平均の110～120本/坪に対し、160本/坪の密植栽培とするとともに、きめ細かな栽培管理と徹底した病害虫防除により、高い単収と品質を両立している。

また、半島地域で海風が強いことや、爆弾低気圧で被害を受けた経験等を踏まえ、ハウスの補強や防風ネットの設置、露地栽培から施設栽培への移行など、風の被害を受けにくい生産体制としている。



【直挿し栽培の被覆作業】

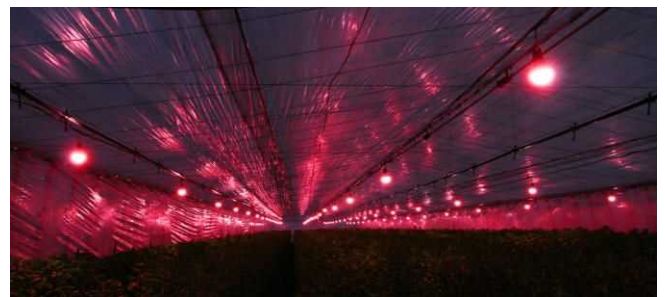


【密植栽培のほ場】

(2) こまめな栽培管理による長期安定出荷

品質にバラツキの出やすい密植栽培であるが、冷蔵処理した挿穂の利用や、こまめな水分と温度管理、株に合わせたホルモン処理技術などによって、均一な生育を確保し、高い品質を誇っている。

その他、品種、気象条件、ほ場の生育に合わせたこまめな管理や、電照・補光による開花調整技術を駆使し、6月～12月に安定した出荷を行っている。



【LEDによる電照の様子】

(3) 大規模経営を実現させるための省力・低コスト化

最も手間のかかる収穫調整において、大量のキクを連続して処理できるよう、水揚げ場や予冷库を適切に配置するとともに、ロボット選花機による重量選花と等階級分けを自動化することで、省力・効率的な作業環境を実現している。

比較的育苗の難しい7月上旬咲きまでの作型では、購入種苗を利用して労働力を軽減し、育苗の容易な後半の作型では、自家育苗によりコストの低減に努めている。



【選花ロボットでの調整の様子】

5 その他特記事項

（１）地域の技術向上に貢献

平成26年3月にＪＡ秋田みなみ花き部会長に就任し、研修先とのパイプを活かし、国内最先端の栽培技術や資材情報などを地域に普及するとともに、バラバラであった部会の技術を統一・体系化したほか、新品種の試作試験などにも積極的に取り組み、地域の技術向上に貢献している。



【花き連きく部会研修会（試作試験ほ）】

（２）男鹿・潟上メガ団地の発展への貢献

平成27年に本格的な栽培を開始した「男鹿・潟上地区園芸メガ団地」では、営農開始当初は、6名のうち4名が新規栽培者であったことから、栽培経験のある安田氏ら2名が指導役となって、毎週金曜日に「花金サミット」を実施した。これにより、団地内の栽培上の課題の共有や技術の連携強化を図っており、栽培技術の平準化に貢献した。



【花金サミットの様子】

（３）今後の展開

平成30年11月に青年農業士、平成31年3月に秋田県花き生産者連絡協議会きく部会長に就任した。花づくりの卓越した技術とセンスは誰もが認めるところであり、地域内外の生産者の先導的役割を担っているだけでなく、オール秋田でのキク産地拡大、生産振興に尽力している。

令和元年度からメガ団地において、農林水産省の「スマート農業技術の開発・実証プロジェクト」により、露地小ギクの生産から出荷まで、先端技術を組み合わせた機械化一貫体系によるスマート農業の実証に取り組んでおり、中心メンバーの支援を行っている。

また、自身も様々な技術や省力機械等を用いた大規模経営を実践しており、若い生産者が多い当地区におけるモデル的な経営となっていることから、地域の花き生産力の向上と部会等の活性化につながっている。



【花き連きく部会研修会で挨拶する安田部会長】



中山間地域における畜産の力を信じて ～規模拡大への挑戦～

佐藤 拓史 （39歳）

〒015-0516

秋田県由利本荘市鳥海町百宅字清水沢

1 経営発展の経過

幼い頃から、両親が農業に携わる姿を見て育ち、就農前からふるさとの百宅地域や畜産業に関心があった。農業高校の教員を経てふるさとにUターン就農し、地域発展への思いを胸に農業経営を開始した。

●平成15年

北海道にある畜産を専門とする大学を卒業し、北海道の農業高校の教員として就職。農業後継者の育成に貢献し、教え子の多くは若手農業者として活躍。

●平成25年

高校で農業教育に携わる傍ら、北海道の優れた肉用牛の経営体と接する中で、自らも肉用牛経営を行いたいという想いが強く、約10年間勤めた高校教員を退職。故郷で両親の後を継ぎ、肉用牛の繁殖部門の経営を開始して順次増頭。

●平成27～28年

父の代からの繋がりから、神奈川県茅ヶ崎市の肥育農家と消費者を巻き込んで、牛の生産・肥育から牛肉になるまでの過程について学べる交流会などを秋田県と神奈川県の双方で開催。

●令和元年

繁殖牛が63頭に至る。過剰投資をせず、基本技術を実践することで分娩間隔も高い水準を実現。

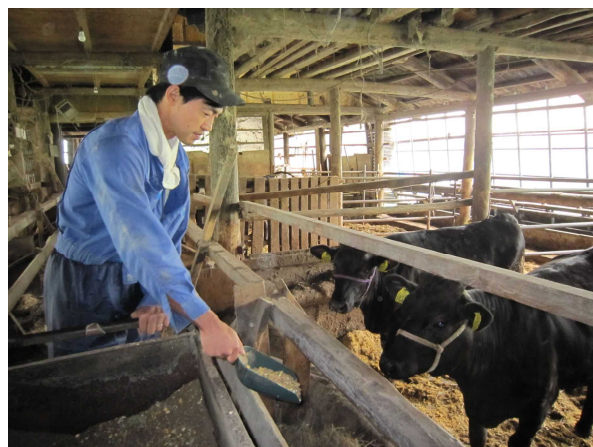
2 経営内容

（1）肉用牛の経営

父の所有する肉用牛20頭を継承し、経営を開始した。現在、牛舎4棟、堆肥舎2棟を所有し、繁殖牛は63頭まで増頭している。

基本を忠実にした技術管理を行うことにより、分娩間隔が地域の平均より短く、子牛生産頭数の向上に寄与しているほか、衛生面・疾病面において、「早期の発見」による管理を基本とし、導入牛の白血病については、淘汰を行う中で今年度の発症は0頭となっている。併せて、規模拡大に応じて省力化を図るため、牛糞を発酵させた牛床で牛を飼養している。

また、就農当初から経営資金を確保するため良質な堆肥を生産・販売している。生産した堆肥は、地域内の農家に利用されているほか、平成26年からは、由利管内の園芸団地やハーブ園などの観光施設に供給しており、そのうちハーブ園では小分けに袋詰めして、一般の消費者に供給している。



【牛の健康状態の確認】

(2) 経営の現状

主 作目と規 模	戦 略 作 目					稲 作			
	肉用牛	W C S							
	63頭	11ha			－				
労働力の状況	労働員数 4人	労 働 力 の 状 況							
		続柄	本人	妻	父	母	雇用等 (パート等)		
		就農日数	360日	300日	200日	230日	0人		
営 の 現 状	主な農 機具及 び施設	種 類	台数	導入年度	性能・規模等	利用した補助事業と融資制度		備 考	
		牛舎	4	S 62	350㎡	J A資金			
				H 5	250㎡				
				H13	750㎡				
				H20	1,050㎡				
		堆肥舎	2	H14	225㎡	J A資金			
				H29	100㎡				
		トラクター	3	H25	34 P S			自己資金	
				H27	20 P S				
				H28	20 P S				
		ホイル ローダー	1	H28	50 P S	元気な中山間事業 J A資金			
		トラック	2	H30	4 t			自己資金	
H30	6 t								
W C S専用 収穫機	1	H23		農業夢プラン応援事業 J A資金					
噴霧器	1	H28				自己資金			
ラッピング マシン	1	H15		農業夢プラン応援事業					
経営規模	年 次		H25	H29	H30	R01			
拡大の概 要	作 目	肉用牛	20	→→→→	63	→	63	→	63 頭
		W C S	11	→→→→	11	→	11	→	11 ha

(3) 作目体系図

作目名	規 模	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	出荷頭数	備考
肉用牛 (繁殖)	63頭	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	41頭	32百万円
繁殖牛は種付けをして、およそ280日後に子牛を分娩。 子牛はおよそ9ヶ月間育成した後、家畜市場へ出荷。 繁殖牛は分娩後50日前後に種付けを行う。 水稲については、稲発酵粗飼料にしている。															

3 消費者や実需者等 ニーズに対応した取組

（１）県内外への出荷

平成30年度には、「あきた総合家畜市場」に41頭の子牛を出荷しており、子牛市場において一定のシェアを誇っている。

また、子牛の発育に合わせた飼料給与を徹底することにより、出荷する子牛は、健康で餌食いの良い牛となっており、購入する農家からは、導入直後の飼いやすさにおいて高く評価されている。

神奈川県茅ヶ崎市の肥育農家との繋がりから、消費者と生産者が合同で、和牛生産から消費者の口に入るまでの流れを学ぶ勉強会を開催しているほか、「ハチマルちゃんC S Aバーベキュー」としてイベントを開催し、肥育素牛の産地として本県のイメージや由利地域の農業についてPRを行っている。

※C S A・・・コミュニティー・サポーターズ・アグリカルチャーの略称。地域の生産者側と消費者側の双方で農業を支える考え方。

（２）地域での連携

就農直後から経営資金の確保はもとより、地域の若い担い手との連携に関心があった。このため、同市内にある（農）鳥海高原花立牧場の材料と、地域の若手農家が規格外の野菜を活用したジャムによるソフトクリームを、地域の行事や祭りなどで移動販売車により販売している。

佐藤氏の地域の農家との交流を深め、盛り上げていく姿勢は高く評価されている。

4 技術紹介

（１）肉用牛の管理

牛の体調管理を徹底し、状態の悪い牛や発情を迎えた牛の早期発見に努めている。その結果、事故率を年間3%以内に抑えているほか、分娩間隔についても県平均の412日に対して390日と短くなっている。

また、子牛の生産率は年間76%と高い技術水準を有しており、平成30年度にJ A秋田しんせい和牛改良部会において表彰を受けるなど、若手農家の手本となっている。

（２）糞尿の処理と良質な堆肥づくり

牛舎の一部では、発生した糞尿をその場で堆肥と混合させて発酵させる発酵床方式を採用しており、堆肥調製の必要がなく、糞尿処理については大幅に省力化されている。管内で同じ方法を導入する畜産農家も出てきており、取組が波及してきている。

また、堆肥については、早くから品質にこだわって製品化しており、堆肥の熟度の確認やコマツナによる発芽試験等を行い、良質で安心して施用できる堆肥として販売している。



【発酵床に取り組んでいる牛舎】

（３）疾病・防疫対策

疾病予防には、日常の牛の観察が重要となることから、常に牛の状態を観察して、問題がある時は、早期に対応することを心がけている。また、 Fogジェット（噴霧機）を導入して消毒することにより、牛舎内の適切な環境づくりに努めている。

さらに、近年全国的に増加傾向にある牛白血病については、定期検査を行い淘汰等を進める中で、今年度の牧場内での発症は0頭となり、今後、子牛を市場販売する上での有利販売につながるものと考えられる。

5 その他特記事項

（１）秋田県の畜産業を牽引していく存在へ

J A秋田しんせい和牛改良部会の鳥海地域の総代、畜産担い手ネットワーク監事、母校である金足農業高校の将来構想検討委員会の委員を務めるなど、秋田県内の多くの場で活躍している。

また、５年連続で農業高校生のインターンシップを受け入れており、秋田県内の若い人材育成に積極的に取り組んでいる。

（２）今後の展開

ダム建設により地域が水没してしまうため、現在営農している百宅地域を離れなくてはならないが、新たな場で肉用牛の増頭に取り組み、現在の63頭から最終的には150頭程度の経営を目指していくこととしている。今後、更なる活躍が期待される若手農家の一人である。



【愛情を込めて牛を育てる佐藤氏】



【百宅にある牛舎】



プロジェクトMEGA

～地域農業の活性化を目指して～

農事組合法人メガファーム

〒019-0512

秋田県横手市十文字町越前字越前

1 経営発展の経過

●平成8年

大区画ほ場への水稻作付けを契機に「越前営農生産組合」を設立し、農機具を所有する集落営農組織として、水稻、大豆の低コスト化を推進。

●平成24年

米を取り巻く状況が厳しくなる中、一層効率的な水田農業の実践と所得確保、地域農業の維持・発展に貢献することを基本方針として、平成24年度に（農）越前を設立。水稻と大豆の作業受託を中心に、地域の農地の保全と、担い手の所得確保を推進。

●平成25年

横手市園芸メガ団地事業構想が掲げられ、園芸品目の導入拡大、地区の農業の維持・発展や農業後継者の育成、雇用の創出、地域の活性化を図ることを目指し、JA秋田ふるさとを事業実施主体、（農）越前を営農主体とした事業化が内定。

●平成27年

（農）越前の構成員のうち、園芸メガ団地の営農に従事する6名が、園芸品目の経理の明確化や法人内の意思決定の効率化を図るため、園芸部門を独立して平成27年5月に、（農）メガファームを設立し、園芸メガ団地の営農主体として事業に取り組む。

園芸メガ団地予定ほ場の給排水対策として、補助事業を活用して地下かんがいシステムを設置し、さらに園芸メガ団地整備事業により、生産施設等を整備して営農を開始。

●平成29年～令和元年

事業による施設整備後3年目となる平成29年には、園芸メガ団地として販売額1億円を達成。さらに、

（農）メガファームとしてきゅうりのネットハウスの増設、ほうれんそうの周年栽培に向けた消雪設備の設置、施設の補強を行い、平成30年も販売額1億円を達成。令和元年にはネットハウスを更に増設し、規模拡大を推進。

2 経営内容

（1）園芸メガ団地による大規模経営

きゅうり、ほうれんそう、キク、すいかの4品目を組み合わせ、販売額1億円を3年連続達成した。

法人内の情報共有等のため、毎月、各作目の生育状況の確認や販売状況等の計画に対する進行管理を実施している。

また、規模拡大、事業活用や冬期品目等の作付計画等については、臨時会議として随時話し合いを実施し、決定している。

（2）地域全体の産地化に貢献

園芸メガ団地事業実施3年目で販売額1億円を達成したことで、管内の農業法人や認定農業者からの関心が高まっている。特に、サテライト団地として平成29年から（農）館合ファーム（ほうれんそう、すいか）、令和元年には（農）なごみ（きゅうり）が施設整備を実施するなど、地域全体に産地の拡大が進んでいる。

JA秋田ふるさとでは、メガ団地の整備により産地規模が拡大して販売額が増加しており、きゅうりの販売額が過去最高を更新したほか、キク全体の販売額も4億円を上回っている。

(3) 経営の現状

経営の現状	主 な 作目と 規 模		戦 略 作 目				稲 作			
	きゅうり		ほうれんそう		キク	すいか				
	2.4ha		0.6ha		1.8ha	1.0ha	—			
	労働力 の状況		構成員数		構成員常時 従事者数		常時雇用者 (延べ)	臨時雇用者 (延べ)		
	6 名		—		—		3,944名			
の 現 状	主な農 機具及 び施設									
			種 類		台数	導入 年度	性能・規模等	利用した補助事業と融資制度		
			きゅうり施設		20棟	H27	77坪10、80坪10	園芸メガ団地事業、JAリース		
			きゅうりネットハウス		10棟	H27	92坪	園芸メガ団地事業、JAリース		
			ほうれんそう施設		50棟	H27	75坪	園芸メガ団地事業、JAリース		
			キク施設		7棟	H27	87坪、84坪5、60坪	園芸メガ団地事業、JAリース		
			トラクター		3台	H27	15ps、25ps2	園芸メガ団地事業、JAリース		
			ブームスプレーヤー		2台	H27	自走式（キク）	園芸メガ団地事業、JAリース		
			自動梱包機		1台	H27	ほうれんそう	園芸メガ団地事業、JAリース		
きゅうりネットハウス		9棟	H29-31	88坪6、92坪3	夢プラン事業					
経営規模 拡大の 概要	年 次		H27		H28		H29		H30	
	作 目	きゅうり露地	1.0	→	1.3	→	1.9	→	1.9	ha
		きゅうり施設	0.0	→	1,575.0	→	1,757.0	→	1,575.0	坪
		ほうれんそう	1,875.0	→	3,750.0	→	3,750.0	→	3,750.0	坪
		キク 露地	1.6	→	1.6	→	1.7	→	1.7	ha
		キク 施設	59.5	→	567.0	→	567.0	→	567.0	坪
		すいか 露地	1.0	→	1.0	→	1.0	→	1.0	ha

(4) 作目体系図

作目名	面 積 規 模	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	出荷量
きゅうり露地 きゅうり施設	1.9ha 1,575坪				▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	142.2t
ほうれんそう	3,750坪				▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	34.4t
キク露地 キク施設	1.7ha 567坪			▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	495千本
すいか露地	1.0ha				▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	37.2t

※▼定植 □収穫

3 消費者や実需者等ニーズ に対応した取組

(1) きゅうり：「通いコンテナ」の利用

パッケージ対応限定出荷先向け「通いコンテナ」で出荷している。袋詰め作業の軽減により、出荷調製作業時間は1／2程度短縮されている。

また、出荷袋を使用しないため、出荷経費は100本当たり2円軽減されている。

(2) ほうれんそう：隣接団地と連携出荷

隣接する「十五野団地」と連携し、全て系統出荷を行っているほか、メガファームほ場が市場現地視察場所となり、実需者との交流を進めている。

(3) キク：「エコマム」の栽培

出荷先からのゴミ削減等の要望から、規格より短く下葉掻きをした「エコマム」を積極的に取り入れ、予約出荷している。

(4) すいか：「あきた夏丸」の栽培

秋田県のオリジナル品種「あきた夏丸」はJAの主力品種であり、メガファームでも経営に取り入れてきた。「あきた夏丸」は果肉に空洞ができにくく、シャリシャリとした食感で棚保ちが良い品種であり、市場や消費者からも評価されている。

4 技術紹介

(1) きゅうり：県内トップの生産規模

法人経営のきゅうり栽培では、県内トップの生産規模を誇っており、施設、ネットハウス、露地を組み合わせ、長期出荷に対応できる体制としているほか、複数の品種を組み合わせ、定植時期をずらすことにより、出荷ピークを分散している。

また、ネットハウスの導入により、露地栽培と比べ殺虫剤の使用回数を1／3程度に削減できたほか、温度や湿度の確保や、風によるスレ果、キズ果の減少により、約2割増収している。

さらにきゅうり栽培は、手作業が主体であるため、50人近い作業員を雇用している。効率的に作業を行うため、ミーティングを実施して作業スケジュールの管理を徹底しているほか、技術習得対策として、熟練者と初心者との組作業にすることで、作業内容を早期に習熟できるようにしている。

近年は、ほ場内にソルゴーやそばを植え付け、天敵を活用した害虫抑制にも取り組んでいる。



【導入が進むきゅうりのネットハウス】

(2) ほうれんそう：大規模施設による長期出荷

隣接する十五野団地を目標に、大規模施設による長期出荷に取り組んでおり、きゅうりと同様に、作業は熟練者と初心者との組作業とし、作業手順の早期の習得を進めるとともに、作業のスケジュール管理をしている。

また、出荷実績等が見える化し、作業員の意欲の向上に努めている。

さらに、平成30年から「トヨタ式カイゼン」を取り入れ、出荷調製作業における作業体系や労働環境について、効率化に向けた作業計画等の見直しを進めている。

加えて、連作対策として、還元太陽熱消毒を取り入れ、効果をあげている。



【トヨタ式カイゼンで収穫作業の効率化】

（３）キク：露地ギクの機械化、低コスト化

主力の露地ギクでは、露地電照やホルモン剤を利用した開花調節を行い、需要期安定出荷を進めており、特に、芽なし省力品種を主品種として、同一品種による長期出荷に取り組んでいる。通常の品種に比べ、親株管理や芽掻き作業を省力化している。

また、施設、露地を組み合わせ、他の花きも含め５～１２月の長期出荷を行っている。

キク移植機、ブームスプレーヤ、フラワーバインダー等の省力化機械を導入し、省力化や労力軽減も進めている。



【盆期向け大規模露地ギクの生産】

（４）すいか：連作障害対策の実施

基盤整備されたほ場で土が硬く、根張り不足になりやすいことから、連作や排水対策として、２年に１回程度、下層の土を表面に反転するプラウ耕を行っている。

５ その他特記事項

地域内の農家主体に雇用場として、冬期以外では９０名前後が雇用されており、地域経済の活性化に大きく貢献している。



移住就農者による 大規模園芸経営への取組

合同会社久保井ファーム

代表社員 久保井 優司（44歳）

〒016-0804
秋田県能代市万町

1 経営発展の経過

●平成24年

東京でバスの運転手をしながら“このままでは終わりがたくない”と、米づくりでの自立を真剣に考えるようになり、新農業人フェア、移住フェア等に参加したほか、相模原市の水田を借りて水稻栽培を開始。

●平成25年

新規就農し、無農薬で米の栽培を行うことを決意。
その後、家族の了承を得て、Aターンフェアに参加し、県農業公社職員から、新規就農に熱心な能代市を紹介され、ねぎなら新規就農が可能とのことから、ねぎ農家になる決意を固める。

●平成26年

3月に妻の出身地である能代市に移住。
4月から2年間、「地域で学べ！農業技術研修」、「農業次世代人材投資資金（準備型）」を活用し、園芸メガ団地に参画する農業法人でねぎ、水稻、大豆の栽培技術を研修。



【関係機関によるサポート】

●平成28年

認定新規就農者となり、移住関係事業、新規就農関係事業を活用しながら、ねぎとキャベツの農業経営を開始。

●平成30年

順調に規模拡大を進め、雇用労働力を確保するため農業法人（同）久保井ファームを設立。

2 経営内容

（1）ねぎとキャベツに特化した経営

地域での生産が盛んで、白神ブランドとして出荷され、収益を得やすいことや、機械化一貫体系による栽培が行われていること、共通の機械を利用した作業も多いことなどから、ねぎとキャベツに特化して取り組み、収益の向上を実現している。

（2）飛躍的な規模拡大

新規就農者は経営初期のリスクを回避するため、徐々に面積を拡大する経営計画が主流となっている中、久保井氏は、参入初期から持続可能な所得を確保できるように大規模で経営を開始し、更に積極的に規模拡大を図ったことにより、早期の経営安定化につながっている。

特に県外から移住する場合に課題となる農地確保については、研修先の農業法人や地域の農家から信頼を得て確保しており、経営開始後も順調に規模を拡大している。

(3) 経営の現状

経営の現状	主 な 作目と 規 模		戦 略 作 目				稲 作					
	ね ぎ		キャベツ									
	1.8ha		1.6ha				—					
	労働力 の状況		構成員数		構成員常時 従事者数		常時雇用者 (延べ)		臨時雇用者 (延べ)			
	2 名		2 名		—		630名					
営 の 現 状	主な農 機具及 び施設											
			種 類		棟数 台数	導入年度	性能・規模等		利用した補助事業と融資制度		備 考	
			格納庫		1	H28	50坪		移住就農まるごと		無償貸与	
			パイプハウス		1	H28	52坪		移住就農まるごと		無償貸与	
			トラクター		1	H28	51PS		移住就農まるごと		無償貸与	
			ロータリー		1	H28			移住就農まるごと		無償貸与	
			ブロードキャスター		1	H28			移住就農まるごと		無償貸与	
			ねぎ管理機		1	H28			移住就農まるごと		無償貸与	
			キャベツ移植機		1	H28	1 条		移住就農まるごと		無償貸与	
			ハイブリウム		2	H30	5000		夢プラン、青年等就農資金			
			ねぎ掘取機		1	H30			夢プラン、青年等就農資金			
			ねぎ根葉切剥機		1	H30			夢プラン、青年等就農資金			
軽トラック		1	H28									
経営規模 拡 大 の 概 要	年 次		H28 H29 H30									
	作 目	ねぎ キャベツ	0.6 → 1.1 → 1.8 ha									
			0.2 → 0.3 → 1.6 ha									

(4) 作目体系図

作目名	面 積 規 模	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	出荷量
ねぎ	1.8ha	○	—	◎	—	◎	—	—	□	—	—	—	—	40,775kg
キャベツ	1.6ha	—	—	○	—	◎	—	□	◎	—	—	□	—	71,735kg

※○：播種 ◎：定植 □：収穫

3 消費者や実需者等 ニーズに対応した取組

(1) 加工用キャベツへの取組

近年の野菜消費動向として、カット野菜等の加工用野菜の需要が増加していることから、平成30年に地域の若手生産者4名が連携し、キャベツ収穫機を全農あきたからリースして、加工用キャベツの出荷を開始している。

出荷調整作業で省力化を図ることができたほか、契約出荷のため価格が安定し、経営面でプラスとなっている。

令和2年には、若手生産者でキャベツとねぎのネットワーク型大規模園芸拠点整備を計画しており、実需者が要望するロットに対応可能な生産体制を整えることとしている。



【加工・業務用キャベツの勉強会】

(2) 市場ニーズに対応した取組

出荷先であるJAや市場のニーズに対応するため、品質には気を配っており、毎日の見回りによるほ場状況の確認や生育に合わせた臨機応変な管理作業を行っている。

出荷目揃え等にも参加し、出荷品質の向上・安定を心がけている。



【管理の行き届いたねぎほ場】

4 技術紹介

(1) 基本技術の励行

就農後、間もないこともあり、栽培に当たっては、基本技術の励行を徹底している。毎日の見回りでは場の状況を確認することを最も重視しており、病害虫の発生やその予兆、雑草の発生をいち早く把握し、早期に適切な防除等を行うように心がけている。特に病害虫の発生状況については、地域の生産者と頻繁に情報交換し、迅速に対応が取れるよう工夫している。

また、市農業技術センターで毎年土壌分析を行い、分析結果に基づいた施肥設計を行っている。



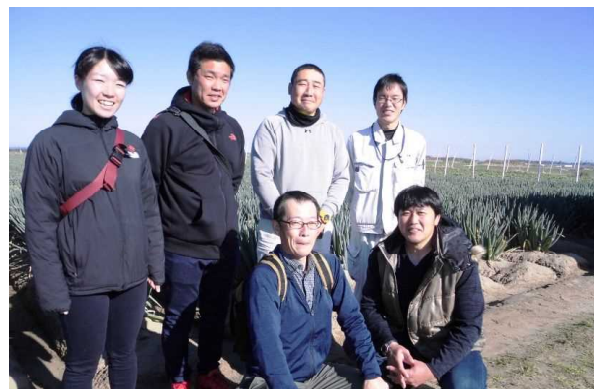
【関係機関による指導】

(2) 技術向上に向けて

地域の先輩農家、関係機関、同世代の農家等とのつながりを大切にし、指導を受けたり、情報交換を行いながら技術の向上を図っている。

地域の生産者はほ場と自らのほ場を比較し、改善点を見つけるなど、常に努力を怠らない姿勢が評価され、地域の生産者からも信頼を置かれている。

また、収益確保には規模拡大、労働力の確保、機械の導入が重要と感じており、今後の経営発展を円滑に進められるよう、法人化を契機に人材育成に努めている。



【同世代のねぎ生産者達と】

5 その他特記事項

(1) 移住就農に立ちはだかった壁

新たに農業を始めるには4つの壁があるとされており、特に移住就農では、地域での生活基盤の確立も並行して進める必要がある。

久保井氏はこれらの壁を次のように乗り切って、就農定着に成功している。

移住就農者に立ちはだかる壁

経験の壁

- ・農業経験ゼロ 技術をどう身につける??

資金の壁

- ・農業機械、作業施設の準備に多額の投資

農地の壁

- ・よそ者に農地は貸せない

地域の壁

- ・生活基盤整備
- ・地域への溶け込み

さらに移住就農者は
生活基盤の整備、地域への溶け込みも必要

①経験の壁・・・農業経験ゼロ

当初描いていた無農薬の米づくりに拘らず、能代市が勧めたねぎに取り組み、メガ団地に参画する農業法人でねぎ栽培の研修を受け、知識と技術を習得した。



【ねぎの出荷調製作業】

②資金の壁・・・農機具や作業施設が必要

移住就農まるごと支援事業により、機械設備の無償貸与を受け、経営開始に伴う投資を大きく抑制した。

このことにより、次年度以降の運転資金を確保でき、経営が回り出した。



【まるごと支援事業で導入したトラクター】

③農地の壁・・・よそ者に貸してくれるのか

就農意欲や情熱、人柄が地域の農家の心を動かし、研修先の法人の厚意で1haの農地を無償で借りることができた。就農後においても、行き届いたほ場管理や前向きな姿勢が地域の生産者の信頼獲得につながり、その後の農地の確保と規模拡大が可能となった。

④地域の壁・・・知らない土地でなじめるか

行政や関係機関、農業法人などのサポート体制があり、アドバイスを素直に受け入れたことにより、地域に早く溶け込むことができた。

また、地域の若手生産者と積極的に交流したことで、久保井氏を応援しようという機運が徐々に高まった。

(2) インターンシップ研修の受入れ

移住就農者の先輩として、県農業公社主催のインターンシップ研修において、県内外からの研修生を受け入れるなど、農業後継者の確保と育成にも力を注いでいる。



【東京都出身の研修生の受入れ】



耕作放棄地の再生と にんにく新産地形成

株式会社しらかみファーマーズ

〒018-4301

秋田県北秋田市米内沢字長野岱

1 経営発展の経過

●平成23年

北秋田市内の建設業者3社が農業への新規参入を目指し、にんにくなどの生産と加工に取り組む法人「(株)しらかみファーマーズ」を設立。

設立の目的は、社員雇用の安定維持と耕作放棄地の再生による地域活性化。



【(株)しらかみファーマーズ社屋】

●平成24年

雇用を創出する農林漁業ビジネス支援事業を活用し、にんにくの生産機器、加工設備を整備。

●平成25年

にんにくの加工品「白神フルーツ黒にんにく」の製造・販売を開始。

●平成27年

農業経営発展加速化支援事業を活用し、黒にんにく熟成設備、深耕ロータリーを整備したほか、次世代経営6次産業化チャレンジ事業の活用によりにんにく加工設備を整備。



【黒にんにく熟成設備】

●平成28年

にんにくの連作障害の対策として輪作しているだいこんを活用した「白神いぶりがっこ」の製造・販売を開始。

●平成29年

同社が主導し、北秋田・大館にんにく生産振興協議会を設立。各種講習会、視察研修会による会員の技術力向上や優良種球の安定確保に取り組む。

●平成30年

同社が主導し、秋田県にんにく生産者協議会設立。園芸メガ団地整備事業により、にんにく・だいこんの生産設備を整備。

2 活動内容

(1) 建設業の強みを活かした耕作放棄地の再生

法人の母体が建設業であり、建設機械を活用できる環境にある強みを生かし、平成23年の設立以降、中山間地域にある延べ20haの耕作放棄地を農業者から借り上げて再生している。



【建設機械を利用した耕作放棄地の再生】

(2) にんにくの栽培

北秋田市は、にんにくの主産地である青森県田子町と気候が類似しており、栽培適性が高いと想定されたことに加え、地域の主要作目である水稻やえだまめ等との繁忙期が重複しないことから、主たる品目としてにんにくを選定している。



【にんにく植栽風景】

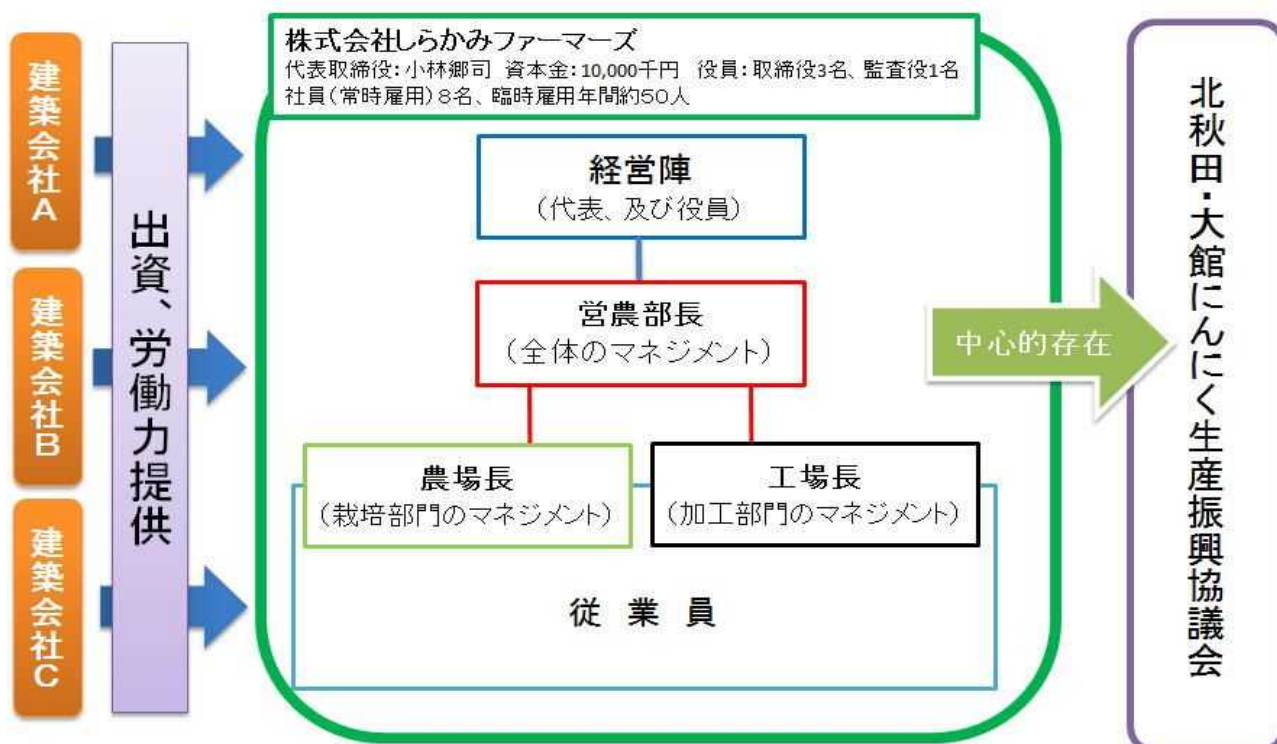
(3) 補助事業の活用による機械化推進

補助事業を活用して作業機械を導入し、省力・効率化と作付面積の拡大を図っている。



【にんにく植付機による定植作業】

(4) 組織図



3 地域の特産を活かした 6次産業化の取組

(1)「白神フルーツ黒にんにく」の製造

収穫したにんにくの高付加価値化を目指し、平成25年から黒にんにくの製造に着手している。

黒にんにくの製造は生産者によって方法が異なっており、統一されたマニュアルがなかったため、製造方法については試行錯誤を繰り返しながら、独自のマニュアルを作成している。また、製造機械については、地域の鉄工所や電気工事店からの協力を得て、整備している。



【白神フルーツ黒にんにく】

(2)「白神いぶりがっこ」の製造

土壌病害虫の発生や連作障害等を回避し、土壌の若返りを図るため、にんにく、だいこん、緑肥作物等の輪作を実施してきたが、平成28年からは、だいこんを加工業者に出荷するだけでなく、自社でも加工に着手している。



【だいこん収穫の様子】



【白神いぶりがっこ】

(3) 平成30年度6次産業アワードにて奨励賞を受賞

平成31年3月5日に東京都で開催された「6次産業化優良事例表彰式（主催：6次産業化推進協議会）」において、地域に先駆けて、新規作目であるにんにくに取り組んだ上に短期間で、6次加工品である黒にんにくの加工・販売を軌道に乗せたという点が評価され、奨励賞・新規領域開発賞を受賞している。



【表彰式の様子】

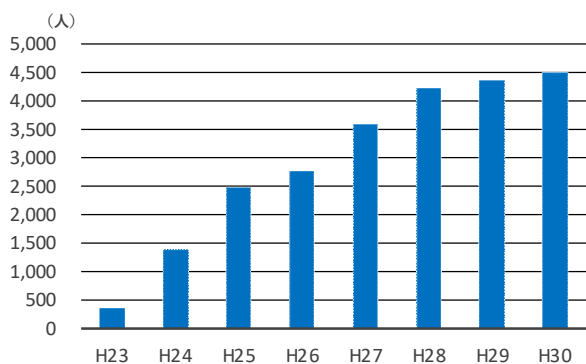
4 地域農業、地域社会 に及ぼした影響

(1) 雇用機会の創出と地域企業との連携

常時雇用20人、農繁期（6～7月の収穫期、9～10月の植え付け期）には、50人の臨時雇用を創出しており、従事者の年間延べ人数は、平成25年の1,700人から29年には4,300人に増加している。

また、にんにくの乾燥設備や黒にんにくの製造設備については、産地への視察の際に設備を観察し、地域の鉄工所や電気工事店からの協力を得て、図面から設備を自作している。

さらに、自らが持つ生産技術や加工のノウハウなどは、地域の仲間に積極的に提供している。



【延べ作業従事者数】



【調整作業の指導】

（２）にんにく生産者の増加と全県への波及効果

（株）しらかみファーマーズの活動が地域に波及し、にんにく生産者が増加してきたため、平成29年に同社が発起人の１人となって「北秋田・大館にんにく生産振興協議会」が設立された。

生産技術の向上や種球の安定確保などを目的に、研修会や情報交換会を開催しており、この活動は全県に広がり、同社は中心的な役割を担っている。

このように、（株）しらかみファーマーズは、北秋田地域におけるにんにくの新産地形成を力強く牽引するとともに、６次産業化による周年雇用の経営モデルとなっており、地域雇用の受け皿としても地域活性化に大いに寄与している。

令和元年のにんにく収穫作業が一段落し、今年も高品質なにんにくが収穫されている。過去の様々な課題を受け、種球生産技術の改善に取り組んできた努力の成果が今、現れ始めている。

また「秋田県にんにく生産者協議会」の会員数は年々増加しており、現在は１６名（法人含む）となっている。



【講習会の様子】

北秋田・大館地域 にんにく栽培の手引き



平成３１年２月
作成：秋田県北秋田地域振興局
農林部 農業振興普及課

【にんにく栽培の手引き】

令和元年度ふるさと秋田農林水産大賞審査委員会
委 員 名 簿

区 分	所 属	職 名	氏 名	備 考
審 査 委 員 長	秋田県農林水産部	部 長	齋 藤 了	県
審 査 委 員	秋田県立大学生物資源科学部	教 授	津 田 渉	大学教員
〃	日本政策金融公庫秋田支店	農林水産事業統轄	柴 田 信 道	農業関係団体
〃	あきた食品振興プラザ	副 会 長	矢 吹 達 夫	学識経験者
〃	秋田県農業協同組合中央会	営農農政部長	淡 路 保	農業関係団体
〃	秋田県土地改良事業団体連合会	専務理事	藤 原 元 吉	農業関係団体
〃	秋田県地域婦人団体連絡協議会	会 長	小 玉 喜久子	消費者団体
〃	秋田県町村会	事務局長	水 谷 津	学識経験者
〃	秋田県農林水産部農林政策課	課 長	齋 藤 正 和	県

令和 2 年 3 月 発行

**令和元年度ふるさと秋田農林水産大賞
受賞者の業績**

編集・発行 秋田県 農林水産部 農林政策課
〒010-8570 秋田市山王四丁目1番1号
(秋田県庁本庁舎4階)
T E L 018-860-1723
F A X 018-860-3842